

---

# STELLAR CLOCK

タナバタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

STEELAR CLOCK

### 【Nコード】

N6770V

### 【作者名】

タナバタ

### 【あらすじ】

北海道、某所。街の中心にある大きな星時計。通称：ステラクロック。そこには都市伝説があった。

『このステラクロックで願い事すると必ず叶う』

そんな都市伝説を信じる純粹(?)な女子高生が一人。名前は 蠅火 香恋

その都市伝説を使って恋を叶えようとする純恋物語。 たぶん。

ところが、ある日、天文部のみんなで合宿をしようと自然公園に行くのだが、そこである事件に巻き込まれてしまう…

## 1. Dream Dream

ある駅の大時計が深夜12時を指す前に。

子供はみな寝静まった夜に一人、佇む者がいた。

そして彼女が空を見た瞬間、一斉に駅から最終電車が出発する。

その後ものの1分もしないうちに星の大時計がきっかり『二人』を重ね合わせ、時を告げる。

彼女の視野にはまるで自分がこの夜空に呑みこまれてしまいそうなくらい、大きく、そして綺麗な星たちが瞬いていた。

「よし、今日も頑張るよっ!!」

元氣よく自分を高めるように言ったのは『蠍火香恋』  
星城高等学校3年生。今年が受験の時である。

「…とりあえず帰らなきゃな…って、最終電車が無いっ?!?!?」

彼女は駅のホームを見渡すと、電子ボードに光る文字は、既にもう無かった。

券売機も販売終了の文字が赤くくつきりと表示されていた。

「…あれ…いつもはこんな時間にならないんだけどなあ。。。そもそも私、なんでここに居るんだろ…。」

焦りの表情が目に見えて浮かぶ。

そんな中、焦っていると一件の着信。

幼馴染、獅子ヶ谷麗音からの着信である。

「あ、麗音…。嘘！？このタイミング！？」

焦りながらも一つ深呼吸をして、電話に出る。

「も…もしもし！？」

「…まあ、その様子だと電車を乗り逃してホームで拳動不審になっている最中？」

「な、なんで分かったの！？」

「だって後ろに居るから…」。

そう言った電話の相手は彼女の肩にポン、と手を置く。

「うわああああ！！！？？誰ですかあ！！！？？」

「いや、だから俺だって」

「なんだ麗音か…」。

「いや、さっき言ったし。聞けよバーカ。」

「それはともかく…。終電のがしちゃった。」

「…ったく、お前はどこをほっつき歩いてやがったんだ？」

少し考えてから言っべきかどうか迷った拳句、結局言っ。

「狐小路あたりを…ちよつとね。」

「…またお前、スカウトだのに捕まってたのか？」

「ええ…まあ。うん…。」

しょんぼりしながら香恋は言う。

「…とりあえずほら。迎えに来てやったんだ。感謝しな！」

麗音は香恋の手を取り、駅の外側へと歩き出す。

「ちよ、ちよつと！？何処行くの！？」

「タクシー拾うに決まってるんだろ？ほら、自分でも歩け。」

「あ、ちよつ、待ってよお！！」

二人は星の大時計の真下をぐぐり、イルミネーションの方へと歩き出した…。

> h r <

「………っていう妄想！………じゃなくて、夢を見たのよ……！」

「…はいはい。それはよかったですね」

よしよし、と、香恋ではない方の女子は頭をなでる。

彼女は『瓶井かめい 水樹みずき』

香恋とは違い、クールで穏やかな性格。結構乗り気も良い優しい親友だ。

「と、いかまずどうやって彼はそこに来たのよ？タクシー拾うとか言ってるくせに…。」

「だーからー、夢なんだって!!」

「まず貴方達は幼馴染じゃないし…。  
もしアニメ化とかだったら誰がナレーションするのよ?」

「そりゃあ…夢なんだから私じゃない?」

「誰でもいいけど。」

「うわっ、酷い…。」

と、このように5つ気もある。

そこで、学校のチャイムが校舎内に鳴り響く。  
担任の熱意ある(?)声が今度は教室内に響く。

「おい!!席に着けよ?いいか、いいな?きりーっ!!…!!礼!!」

「おはよーございまーす…。」

「ウエハース…。」

「は?」

「ねえねえ、『ウエハース』って口ごもって言ったら『おはようございます』に聞こえない？」

「そんなどうでもいい事考えてたら教科書読みなさいよ…。」

「なあに？低血圧？あらやだ年増あ…。」

「悪かったわね、年増で。」

「ほんと、水樹は姿ならイケイケのOLって感じなのに…これで高校生かあ」

「大人っぽい、とかそういう言い方出来ないの？もう…。」

水樹はため息をつきながら席を立つ。

「何処行くの？」

「ちょっと購買行ってくるよ。香恋も来る？」

「奢って」

「死になさい」

「…御免なさい」

水樹のこの一言でいつも香恋は撃沈されるのであった。



## 2・Sweet Sweet

・購買：

「奢れよ…少しくらいいいだろ？」

「…お前には昨日俺が奢っただろ。今日はお前な。」

「え？マジか！？じゃあ奢らないとな…。」

そう言つて財布を取り出す少年。彼の名前は『秤谷 天』はかりだに たかし』  
スポーツ大好き少年。…少しばかり馬鹿で、騙されやすい傾向にある。

そしてその話相手は『獅子ヶ谷 麗音』ししがや れおん』  
香恋の妄想…いや、夢に出てきた少年。この二人は苗字に『谷』が入っているためにまとめて谷と呼ばれることがある。

「あ、谷がいるよ？」

「おーい、谷！」

「「俺らをまとめて呼ぶんじゃねえ！！！」」

そう言っている割には息もぴったりである。

「…息ぴったりじゃん。」

「ｗｗｗｗ」

「おい香恋デメえ、爆笑してんじゃねーよ！！！！」

「…ったく。で、何の用だ？」

と、言いながらさりげなく麗音は天から購買の一番人気、『ふわふわプリン』をかすめ取る。

「ああ！！！！おい麗音！！それ俺のだぞ！！！！」

「あ？お前、さっき奢るって言っただろ？」

「…あ、ああ、そうだったな。やるよそれ。」

「あっさり！？」

「なんで奢るの？」

「昨日、俺が麗音に奢ったんだ。だから俺が次に奢る番で…ってあれ？」

俺、二回連続じゃね？」

「アホだ。」

「馬鹿だ。」

「間拔けた。（もしかもしゃ）」

麗音は既にプリンを開けて食べていた。

「お前ええ！！！！騙したなあああ！！！！」

「おっと、どうやら逆鱗に触れたか？」

右手にプリンを持ち、プラスチックのスプーンをくわえながら戦闘態勢に入る。

「おりえのプリンはわたすあぬええからにや！！」

「何言ってるかさっぱり分かんねー！！！！」

「俺のプリンは渡さねーからな？」

水樹が訊き返す。すると、

「しえいかい！！（正解）」

ピシッと水樹に指をさす。…が、  
啜えているスプーンのせいで物凄くシユールだ。

「…黙ってりゃあイケメンなのにねえ。」

「…」

香恋は黙り込む。何か言いたげだな、と水樹が察し…

「ああ、ごめん、普通でもイケメンか？」

「うん。」

「返事はやつ。光並み!？」

顔は変わらないけどさ…と、水樹は言った。

その水樹の鋭い突っ込みもまた、光並みの速度だった。

「ここで会ったが18年目…。恨みはらしてやる!…!…!」

「いやお前意味分かってないから。それ。」

「喰らえええ!!必殺、仕事人!…!」

「だからそれも必殺技の名前じゃないって。」

麗音は振りかざしてきた腕を素早く避ける。

「ほいさっ。」

「ぐっ…ほおあ…?」

ドサッ…。

天が倒れる。

「あ…やべえ、またやつちまった…。」

「ちよっ、また鳩尾アタック!？」

「え、名前ついてるのそれ?」

技を繰り出した本人が訊き返す。

「とりあえず保健室保健室!!」

>h r <

「うー…くそお…プリン返せえ…」

「まったく、どこまで食い意地の張ってるやつなの？  
ベッドに寝て居ながら寝言がそれって…」

「全くだ。（もしかもしゃ）」

「あんたも!!!!」

先生は麗音に向かって先ほどの鳩尾アタックなるモノを繰り出す。  
ドスッ。

「先生強っ…。」

「じっほお…」

「…貴方達、まだ1時間目も始まってない状況よ？」

ちょっと怒り気味で言ったのは看護教諭の『星沢 鈴』ほしざわ  
りん』先生だ。

まだ20代前半らしく、美人の先生。

「す、すいません…。」

「じゃあ…放課後、ここの掃除任せるからね?」

「えー!?!」

「…何か文句でも?」

「…御免なさい。ないです。やります。やらせてください。  
むしろ土下座してまでやらせていただきます。」

「言い心がけだつ。」

「…先生怖つ…。」

「さーあ、とつとと教室戻る!!!」

「はい…。」

「はい は短く!!!」

「はいっつ!!!」

昼休み。

「でね、まだあの夢には続きがあつて…。」

「もうその話は良いわよ。」

「違うの！思い出せないのよ！その続きが…。それと、その前も…。」

「良くあることですよ？夢なんて…。」

「でも…何か重要な事を言っていた気がするんだけど…。」

それに、あれは夢に思えないほどリアルだったんだよ？」

「はいはい。じゃあ夢に出てきた本人に聞いてみれば？麗音君に。ね？麗音？」

「あ？（もしかもしゃ）」

麗音はチョコレートクリームパンを食べていた。

「…あんた、何かと物を食べてるのね。よく太らない事…。羨ましい。」

「ああああ良いの！！夢の事は！！」

香恋が慌てる。しかし…

「夢？ああー、そう言えば今日見た夢にお前が出てきたぞ。」

「…え？」

「なんか、駅の改札口で戸惑ってて俺が声をかけたんだ。なんつったかな…」

「…待つて。その前に私に電話しなかった？」

「ああ、してたな。そこでお前に終電乗り遅れたのか？って…あ？」

麗音が喰っていたパンを落とす。

「…ちよっ…それって貴方達おんなじ夢見たって事！？しかも会話してるし…！」

「そ、そんな馬鹿な…そんなことあるわけないだろジョーシキテキニカンガエテ」

「常識的に考えても女子高生的な考えでもあり得ちゃってるんだけど…。」

「夢が…繋がってる…」

少しためてから香恋はこういった。

「ステラクロックのおかげだあ！…！」



### 3・Freeze Freeze

「ステラクロック…？」

「なんだあ？その…すてらなんちゃって。」

「…あつ、ちよつ…。」

香恋は少し慌てる。

そして水樹に小声で言った。

「好きな人いるのにダメだね、これ言ったら…。」

「…確実にばれるわね。」

「ヤバイヤバイ…」

「おい、何話してんだ？教えるよそのストアなんちゃっての。」

「なんでコンビ二なの…。ステラクロック。星の大時計って言うたらわかる？」

「え！？ちよつ、水樹！？」

水樹は香恋の口をふさぐ。そして続けた。

「香恋、貴方はドジなんだから麗音にはらしちゃうでしょホントの事を…。」

「ほお、ほおうかあ…。」

「放火？」

「何物騒なこと言ってるのよ!。」

バシィッ…

「ぐっほお…あ…。」

水樹が麗音の腹を殴る。

どうやら強さ的には 水樹>麗音>天 らしい。

「ヤバ…またやつちやった…。」

「また!？」

「あのね、水樹は空手やってたんだよ?しかも8段。」

「御免なさい弟子にしてください。」

「弟子は持たないと決めておるのだ。(ドヤア)」

「ノった!？」

「まあいいわ…。」

と、水樹は香恋にこそつという。

「…やっぱり、別の話題を振るとそつちに引き寄せられるからこの

回避法で行きなさい！

ただし…あまりやり過ぎると効果は薄くなるからね…。」

「ありがとおうう水樹！！」

香恋は頬ずりをする。

「ちよっ、やめてよ！！」

わずかながら照れ隠しをする水樹だった。

---

「きりーっ、ねーい！さよならー！」

日直の威勢の良い声が教室内に響き、放課後が訪れる。

「じゃあ部活行ってくるよ！」

「うん。じゃあ私も頑張ってくるよ。」

「じゃーねー、また明日！」

「…はいはい。いつものことでしょ？」

このやりとりを毎日してから部活動は始まる。  
香恋は天文学部で、麗音と同じだ。

「さあーて、今日は何するのかなー。」

香恋が部室のドアを開くと、既に麗音が待機していた。

「おせーぞお一人で退屈なんだからなあ？」

「はいはい。じゃあ今日は…何するの？」

「ああ？2週間後の合宿の計画を立てるんじゃないのか？」

「が、合宿う！？」

「…お前、また寝てたのか？w 昨日話しただろ？天文学部の奴らで天体観測合宿に行くって。」

「…しまったっ。すっかり忘れてたっ。すっかりすっかり忘れてたっ。」

「いや、それどっちの意味だよ。」

「あら、二人ともそろってたの？」

「揃ってたとはなんだ揃ってたとは。」

「美海！おかえりんこー」

「ただいま………ちょっと廊下来なさい香恋。」

「ええ！？ちよっ、私悪くないよ…っ」

「…ったく、あいかわらず香恋は分からずに変な方向に持ってくし、糸魚川は気にし過ぎるし…」

香恋を廊下に連れて行ったのは「糸魚川 美海くいといがわ みう」  
水色の髪の毛で長髪。リボンでポニーテールにしてある。  
性格は純粹無垢…多分。下ネタには敏感なので、知識はあると思われる。

「香恋！そこは『おかえリンボー』にすればよかったのよ！  
そうすれば私も『ただいマンボウ』で華麗に返せたのに！！」

「そういう問題っ！？しかも華麗なの！？」

「いえ…『おかえりんごー』でも良いわね。  
それならば『ただいマンゴー』で返せてフルーツの2コンボ達成  
が出来る…。」

「いつも通りこいつは医者もお手上げのバカだな。」

「おー、大和。はっぴーな羅夢もいつしょか？」

「…どこぞのハッピーセットみたいな言い方やめてくれない？」

「いいじゃねえか。大和がいないときは子羊ちゃんなんだし。マツ  
クにはラム肉は使われてないぜ？」

「やっぱりハッピーセットが元ネタなのか…。」

この二人一緒に来た男女は『幸村 大和くゆきむら やまと』と『  
幸村 羅夢くゆきむら らむ』

このふたりは双子であり、父親が別の複雑な兄妹。  
そしてどちらも父親がいない。他界したのか…別れてしまったのか

本人でも分からないらしい。

ハッピーセットというのは、この二人が揃うところと呼ばれる。  
苗字が幸村なので、ハッピー、二人でハッピーセット。  
…無論、おもちゃなんかは付いてこない。

「で、全員揃ったところで今日はこのメンバーで合宿をするという  
計画を企てる。」

俺、麗音と香恋、糸魚川、射手、ハッピーセットだ。」

「だからハッピーセットはやめろってーの。」

「ああ、一つ言っただけだったが今日は射手が来られない。俺から伝  
えておくから安心しろ。」

「無視い!?!」

「えー?桜ちゃん来れないのかあ…。」

本日、欠席しているもう一人のメンバーの射手桜。

かなり女の子っぽい女の子で、男子が苦手。天文学部の仲間とは普  
通に喋れるようだが普段は如何に。

髪の毛はピンクのロング。料理が苦手、裁縫は皆無、音痴、など、  
そういった面は女の子らしくは無い。

「場所はどこにするんですの?」

「星ヶ丘丘陵公園なんてどうだ?あそこは空気が澄んでいて綺麗な  
星が見れるぜ?」

「おー、それいいなー。」

「ねーねー、ご飯は？」

「…香恋はそればかりですわね。私がちゃんと食材を持って行ってあげますわ。」

「…勿論、一つのバンガローを借りてそこで焼き肉だ！」

「やったあああ？」

香恋は美海に抱きつき、頬ずりをする。

「きゃっ、や、やめてくださる！？」

「…あー、なんか盛り上がってるところ悪いんだが、今一つのバンガローって言ったか？」

「ああ。それがどうかしたか？」

「…俺らは兄妹だからそんなに気にしないがお前ら男女は気にしないのか？」

「そ、そうでしたわね…」

美海が考え込む。

「（…え…ここで否定したら麗音と一緒に寝れないし…でも否定しなかったらそれはそれで変だし…）」

「まあ、いいじゃないですか？たまにはこういつのも。」

香恋からすると、あまりにもあっけなさ過ぎて少し茫然とした。

「え…結構そう言つの気にするんだろ？なあって思ったんだけど…。」

「

「男子は二人だけですし、そのただけにバンガローを二つ借りるのは痛い出費ですわ。」

まあ…今日は居ない桜さんが気がかりですけど。」

「ああ…射手ならもう許可している。いや、させた。」

きつぱりと答える麗音

「許可させた！？無理やり！？」

「だってきかねえんだもの…。許可しなかったら俺とポツキーゲームやるぞこの野郎って言ったら全力でOKしてくれた。」

「…確かに究極の二択だが…哀れ射手。」

「いいなあポツキーゲーム…。」

「あら、何か言いました？香恋さん。」

「べ、別に何も言っていないよっ」

「よし、それじゃあ何の星座を調べて研究をしてコンクールに出場



するのか決めるぜ！」

「おう！頑張ろうぜ！今度は最優秀賞を取るんだ！」

「バンガローでガンバロー！！」

「……」

「……あー。」

「……うん。」

「……あれ？あれ？皆頑張らないの！？」

「……お前やつは気付いてないのな。」

「……気付かずにダジャレを言って空気を凍えさせるとは……こいつ、雪女か。」

「ダジャレを言ったのは誰じゃー。」

「……お前確信犯だろ。」

#### 4・Exciting Exciting

「おい蠍火!!!麗音!!!居るかぁ!?!」

部室の窓の外から威勢の良い声が聞こえる。秤谷だった。

「あー?なんだー天ー。」

「天君どうしたの?」

「今何やってるー?」

「今は合宿の計画立ててるところだ!」

「俺も行って良いか!?!」

「え?」

この人は何をしに行く合宿なのか分かっているのだろうかと思っ  
香恋は思った。

「ああ?お前、星に興味なんてあったか?」

「いや、ねえけどさ、キャンプみたいなものって楽しそうじゃないか  
!」

子供みたいにはしゃぐ天。公園に着いた時の天の姿が目につかぶよ  
うだった。

「あー…別に良いけどよ、お前、テントな。」

「勿論、そのつもりだぜ!!」

「うし、決定ー。変更は気かねえからなー。」

「あ?え、いやちょっと待てよお前らもテントだろ?」

「俺らはバンガローだ。」

「バンガローでガンバ…」

バシッ

殴られた。

「痛い…。」

「言わせねーよ。」

「俺一人かよ!?!マジで!?!」

「お前、そのつもりだったんじゃないのか?」

いたずらな顔の麗音はまるで子供の時に戻ったかのように思えた。

「じゃー私も行って良いかしら?」

「あ!水樹!!!部活終わったの!?!」

「うん。だから一緒に帰ろうと思ってね。」

と、柔道着を片手に持つ水樹。

「ああ。お前も来いよ。だが、テントな。」

「あんなバカと一緒になんてクソ喰らえよ。あんたが行きなさい。」

吐き捨てるように行った水樹。少しだけ天が可哀そうになった。

「あー…じゃあ香恋と一緒にの寝袋な。こいつちっちゃいし。」

「私ちっちゃくないよー!」

某アニメの迷台詞を言う香恋。

「まあそれでもいいわ。楽しそうだし!」

「なんか賑やかそうな合宿になりそうだな。」

大和が言う。

「そしたら…これくらいにして帰るか。合宿が楽しみだな。」

「うん。じゃあ、また明日ねー!」

こうして、天文部&2名は解散した。

香恋と水樹の二人は電車通いなのでいつもの駅の中で電車を待っていた。

「香恋さア、いつ告るの？」

「ばっ、なっ、なあ　ー！！」

手足をばたつかせて慌てふためく香恋。恥ずかしさを隠すために必死なようだ。

「バナナ？あんた好物だっけ？」

「バナナは固くないよ！！！！男の人の以外はね！！！！」

香恋は自分でも何を言っているのかも分かっていなかった。

「それは鉋物でしょ！！ついでにどさくさに紛れて下ネタを言っなあ！！！！」

バシッ

と、水樹のチョップによる制裁が香恋に下った。

「痛い…。今日殴られてばかり…。」

「あっ、電車きたみたい。」

「人の嘆きすらも無視いッ！？」

そんな最後の香恋の嘆きは水に流され、二人は電車に乗った。

「香恋は黒石駅で降りるんだっただね。次の次が。」

「水樹はもっと遠くの大自然の中で暮らしてるんだっただよね！」

「どこだよそこ。確かに私は森林公園駅で降りるけど。」

「心理公園…どんな心理テストが待ってるんだ…。」

「いや、あんたは心理テストしなくてもバカだっということが丸わかりだよ。」

そんな馬鹿げた会話を終えて香恋は電車を降りる。

「じゃ、また明日ね！」

「うん。また明日ー！！！」

電車が見えなくなるまで手を振ると、香恋はステップ調で帰宅した。

## 5・Feel Feel

そしてそんな平和な日が何日も続いていつしか合宿前日になった。いつも通り全授業終了のチャイムが鳴り終わるとダッシュで香恋は天文部のドアを開けに行く。

「たのもー！！獅子ヶ谷麗音に挑戦しに来たぞー！！」

「あいにく柔道部はここじゃなくて格技場だ。他を当たれ。」

「いつも通りの突っ込みありがとー」

「お前の頭の中はネタ帳か？毎回違うボケかましやがって…。」

「僕は神様のネタ帳を見たことがあるんだ。」

「メモ帳だろ！！」

そんなどっかのニート探偵の言葉を引用するな！と、ノリ突っ込みを忘れない麗音。

「んー、今日は集まり悪いね。まだS H Rショートホームルームやつてるのかなあ。」

「そうなんじゃねえの？まあ俺はお菓子喰って待ってるから良いけどよ。」

そう言ってポッキーを一本、口にくわえる。

「おー、ポッキーガールに成れそくだよ！麗音！忽那 里さんより

美味しそうに食べてるよ！」

「いや、俺男だし…。」

そもそも俺よりも美味しそうに食べる奴はいくらでもいるだろ、例えばお前とか…。

とかなんとか言ってるうちに、人がパラパラと集まってきた。

「ういーっす。わりい、SHRが長引いちまって…。」

「おお大和か。んー、おもちゃつきじゃないか。」

「なんで私がこいつのおもちゃなのよ…。」

と、ハッピーセットが入場。

「ハッピーセットっていうな!!」

「お前ら、誰に突っ込みしてるんだ？」

「え？ああ…ナレーター。」

「居るの！？ナレーターがこの話をしきっちゃてるの！？」

「もうそんなことには慣れたー…」

パカンッ

ポッキーの空箱で殴られる香恋。



「痛い…。」

「おまえ、笑点にでも出てろよ。きっと大ウケだぜ？」

「いやー、眼鏡が無いと目の焦点が合わなくて…」

「お前コンタクトだろ。」

「そっち!？」

「相変わらず賑やかですわね、この部室は。まあ、それが好きなんですけども。」

「おつす美海。ポツキーゲームやるか？」

「なんでいきなりそうなるんですの!？」

脈絡がなさすぎる!と、美海は思った。

「冗談だ冗談。」

「後は桜ちゃんと水樹と天君かな？」

「ああー、水樹と天には伝えてある。大丈夫だ。」

「問題ない？」

「一番良いのを頼む。ってオイ」

「後は桜ちゃんね…。」

その時、ドアをノックする音が聞こえた。

「あ、桜ちゃんかな？」

「おう、今あける……」

「あつ、麗音が開けたら……」

「こんにちは……わぁあッッ！……」

ドスッ……

「……っつふお……？」

ドサッ

と、麗音が鳩尾にグーパンを喰らい、その場に倒れ込んだ。

「あつ……またやつちゃった……」

「っわわわわ御免なさい！！！！（。 。 ——）」

と、倒れた麗音にかけよる射手桜。こいつが麗音を瀕死に追い込んだ張本人である。

「うわっ、おい誰かげんきのかたまりを！」

「いや……回復の薬で大丈夫だ……」

と、鳩尾パンチに慣れているのか麗音が立ち上がる。

桜は男が大の苦手で天文部の仲間たちは大丈夫なはずなのだが、突然目の前に現れると殴ってしまう癖がある。

「ったく…どこの伊波ま　るさんだよ…」

「御免なさい…。(　Ｔ　Ｔ)」

「う、うし…こ、これで全員…揃ったな…」

「お前口クに物喋れてないぞ」

「き、気にするな…ごっふぁ」

「あ、あとで温湿布持ってきます!!　(　。　;　。　)」

「痛いのに温めたら逆効果だろ…。ってかお前のセリフって全部顔文字付きなのな…。」

「さて。逝くのは星ヶ丘丘陵公園展望台だ。明日の朝１０時に現地集合で。」

「誰と逝くのかは自由だ!!」

「いやそれ漢字違うだろ絶対」

「夜空のお星様になりそうだよねそれ」

「じゃあ私は水樹と電車で逝くー!」

「…電車で事故らないことを祈りますわ。」

「駅からはバスを使って大体30分か。ちょっと遠いが我慢してくれ！」

「おー!!」

「さて、そうときまれば身支度から始めるぞ！」

「一つ質問いいか？」

「おう、はっぴーせつと、の大きい方！」

「…一々突っ込みしてられないな。」

「あそこら辺って最近、変な噂が流れてるぜ？なんでも、人が行方不明になるとか…。」

「んあ？そんな噂が流れてるのか？」

「ああ。なんか一晩迎えた頃には既にいなくなってるだとか…。」

「まあーそんなこと気にしてたらキャンプなんて出来ないですわ。」

「それもそうか。ごめん、時間とらせたな。」

「もしかしてそれ、猿じゃない？」

「え？なんで？」

「うわー、さるだあ!! うわ、さるだあ!! 噂るだあ!!」

パソコン！！

Excellent！！

「ここはボーナステージだったのか…。」

と、麗音が香恋に華麗に殴りかかっているのを見て言った。

「痛い…。」

「ともかく！明日現地集合！持って来れる奴は屈折式と反射式の天体望遠鏡を頼むぜ！」

「了解。」

「楽しみだなあ w k t k ! ! !」

「ワクテカワクテカ（＊´、´）」

「…お前、そんなキャラだっけ？」

「しつ、失礼なッ！！最初からこんなですよ！！>#、´<」

「…そ、そうか…。」

## 6・Shooting Shooting

そして当日。

昨夜は楽しみで楽しみでしうがなかつた香恋。あまり寝られなかつたようだ。

駅で水樹と会う約束をしていたので、合流するためにとりあえずステラクロックのある駅へと向かつた。

「あー寝不足だ……。目に隈ができちゃつてるよ……。」

鏡で自分の顔を見るなりため息をつく香恋。

「おまたせー。待つた？」

「あ！水樹！私も今来たところだよ！」

「それならいいけど……このオブジェクトの前集合はやめてくれない？ここは東側だけどせめて場所も指定して。

西側にも白い別のオブジェがあるんだから……。」

「これは失敬失敬……。」

「じゃ、向かいますかあ。」

「ちょっと待つて！」

と、香恋が水樹の足を止める。

「ん？なしたの？」

「ステラクロックにお願いしに行こうよ…。  
もしかしたらこの合宿で麗音と仲良く…」

「そんなつもりで来たのなら帰れ天然バカ娘。」

「ひ、酷い…。」

「冗談よ冗談。アメリカンジョークよ。」

「いやそれアメリカンじゃないよ。ナチュラルフリーッシュユガール  
って言わないと…。」

「アナタも十分アメリカンジョークできてないわよ。」

そんな会話をしながら、二人はステラクロックの扉の前まで来た。

「ここって神社みたいな感じになってるよね。それなら北海道神宮  
に行けばいいのに…。」

「それはあんたにも言えることですよ。」

「あ、そうか！それなら大丈夫だね！」

「なんでそこがポジティブ思考！？」

「さ、行こう！」

二人がステラクロックの中に入ると、大きな柱にポスターが貼ってあった。

「んー？工事をするんだあ。」

何やらそのポスターはステラクロックの内装や外観をすべて変えるとのことだった。

しかし、どこにもその会社名やステラクロックのマークが無い。少し怪しげな雰囲気が漂っていた。

「…大和ハウチュとかそういった建築の会社名がないね…。」

「…今噛んだのは聞きのがさなかったよ…？」

「…って、あんたまさか本当に大和ハウチュだと思ってるんじゃないでしょうね。」

「え！？違うの！？」

「…はあ。」

水樹が大きなため息をつく。

この先が思いやられるわ…と。ベンチに腰を掛けた。

「どうやら今日の午後からここが封鎖されるみたいだから今日がキ



ヤンプで良かったわね。

私はここで待ってるから、ほら、流れ星にお願いしてきなさい！」

「うん！」

香恋は階段を駆け上がり、5階のプラネタリウム展望台に来た。

プラネタリウム展望台は、広い天井中に世界で見られる星、星座が散りばめられている。

しかし、ただのプラネタリウムではなくて世界中のカメラから生中継で夜空を見られる。

勿論、生中継なので今は昼の日本や国以外の夜空になってしまう。

いつしかそこでは流れ星や流星群が見られる事が女子高生の間で話題になり、お願い事が出来る確率がアップするので神社的な場所になってしまった…というわけだ。

「今日は何処の国かなあ。あ、イギリスだ！」

香恋は夜空を眺める。すると、眺めていたその先に、大きな三角形が見えた。

「…？あれ、なんで夏の大三角が見えるんだろ…。」

「それはイギリスでは日本と見える星座の位置や角度が違うからだよ。」

と、大人の声が聞こえる。

振りかえると、そこには優しそうなおじさんがいた。

「アナタは？」

「私は蟹江大洋。ここのオーナーさ。星は好きかい？」

「は、はい！」

「そうか。星は良い。人の心をよく表している。  
良いことも、良くないことも…。」

「…え？」

「いや、こつちの話だ。さ、存分に美しい星座達を堪能してくれ。」

と、言い残し、蟹江はその場所を去った。

「…んー。ま、いつか！」

あー！！流れ星！！」

香恋はその一筋の光に3回、その流星の光の速さで願いを託した。

「お願い事してきたよー！」

「ん。じゃあ、行きましょうー！」

水樹が呼んでいた本を閉じ、立ち上がる。

「ねーねー、こつちに優しそうなおじさんきた？」

「え？あんた熟年好きだっけ？」

「違う違う！！でも、その様子だと来てないみたいだね…。誰だっ  
たんだろあの人。」

「ほーら、置いてくわよ？」

「あー！待ってよ！！！」

二人はステラクロックの出口へと向かって行った。

## 7・Track Track

ステラクロックのある駅から電車で約1時間。  
各駅停車なのでここまで時間がかかってしまうが、どうやら香恋や水樹には物ともしないようだった。

そして、近くの駅で降りてからバスを使って30分。  
目的地の星ヶ丘丘陵公園に二人は到着した。

星ヶ丘丘陵公園は、大きな森や川があり、沢山の大自然の中でキャンプが出来る、北海道でも有名なキャンプ場だった。

夏のこの時期ならばカシワやクヌギの木を注意深く探せばクワガタムシや本来北海道にはいないカブトムシも見つかる、子供たちにも人気のスポットだ。

他にも星ヶ丘という名がつくように、大きな丘には見晴らし台が付いており、天体観測にも持って来いの場所だ。

「おい麗音ー！！」

「おー香恋。水樹も一緒だな。」

「二人とも一緒にきたの？チーム谷で。」

「俺らはチームを組んだ覚えはねえ！！」

二人、息ぴったりである。

と、時刻が9時と少々早い割にはぱらぱらと人が集まってきた。  
やはり、家族連れが一番多く、香恋たちのように高校生は居ないようだ。

その中に天文部のメンバーも混ざっており、全員これでそろった。

「そつえば顧問は連れてきたの？」

「あ？邪魔だから連れてこねーよ？居たら夜騒げねーじゃん！」

「…保護者がいなかったら泊れないでしょ…」

「大ジョーブ大ジョーブ！もうバンガローは予約してあるぜ？」

「へえ。二人でもうチェックインしたんだ。」

「あ、ああ…。な、なあ！天！」

「お、おう！！ほら、みんな揃ったことだし、バンガローに荷物置こうぜ！！」

何やらドギマギしているチーム谷であったが、この頃はまだ、自分たちの行動を後悔することはなかったのだった。

谷が率いる天文部メンバーはキャンプ場の外れにあるというバンガローを目指し、歩いていった。

そして…

「ここが俺らのバンガローだ！」

天が張りきって皆に説明するバンガローは意外にも香恋たちが想像していたのよりも大きかった。

2階付きで、ベランダもあるので、バンガローというよりは大きなログハウスと言った方が良いかもしれない。

一応、バンガローの隣にも皆で焼き肉が出来る

スペースがあり、設備に関しては申し分なかった。

そして、極め付けにはドアの前に続く古い線路。飾りの様なものだろうが、果たして必要性は如何に。

「あら、御洒落ですわね。ちょっと古めかしいけど。」

「駄洒落？」

「お前のようにこのバンガローは『駄』目じゃねーよ！」

パカアンッ

本日、1回目の殴りである。

「痛い…。」

「…わぁー…焼肉スペースもあるよー！！、（。＊）」

「…おい桜…あんなに言ってた割にははしゃいでないか？」

と、ハッピーセット兄が問う。

「ハッピーセットじゃねー！！ハッピーだよ！！祭に着る奴じゃねー！！」

「…だから誰に突っ込んでるの？」

ハッピーセットには突っ込まないのですね。  
まあそんなナレーションはともかく。

「そ、そんな分けないじゃないですか！！  
私は嫌々来たんですよッ（\*。\*）」

「（その割には顔文字が嬉しそうなのは突っ込まないでおう…。）」

「…この線路…。使われてたみたいだね。」

「廃線になったのかなあ。でも、線路がバンガローの上にあるね。  
途中で途切れないで階段の下に潜り込んでるー。」

「バンガローの上を線路が走ってどうすんのよ…。」

水樹が顔に手を当てて呆れる。そして、バンガローの裏を見る。

「バンガローの逆側は…森みたいだね。木々が生い茂ってる。」

「水樹…探偵みたいー…かつこいい…」

「ほら、ドア閉めるわよ。」

「切り替えはやつ！？待って閉めないで…！！！」

「…よし、昼までまだ時間あるし、探検に行くぞー！！！！」

威勢良く天が言う。

「探検って…この山の中？」

「そうだぜ！何か新しい発見があるかもしれない！」

「…何の発見だよ。俺はパス！」

「乗り気じゃねーなあ大和は…。他、行く奴いるか？」

「私行くよー！」

「じゃー俺も行こうか。」

「私は食材の下ごしらえと釣りをしますわ。この川には新鮮なヤマメが住んでいますの。」

「え？お前釣りできるのか？」

「勿論ですわ。良い魚、釣ってきて皆さんに振舞うため、頑張りますよー！」

「んー、じゃあ桜と羅夢たちはここで御留守番かな？大和は用心棒って事でー！」



「用心棒って…。水樹はどうすんだ？」

「このおちゃらけ天然娘をこの二人に預けるわけにはいかないですよ。」

「それもそーか。把握。」

「お、おちゃらけ天然娘…。」

「よし決定！！じゃーチーム谷探検隊、出動だ！！」

「…何気に気に入ってるじゃんそのあだ名。」

## 8・Phantom Phantom

「とりあえず、この線路辿って行こうぜ！」

「そうだね。なんか面白そうだし。」

チーム谷の4人は、星ヶ丘丘陵公園展望台の森林へと着ていた。そばには川などがあり、整ってはいないものの、綺麗な森林だった。しばらく4人が飾りと思われる線路をたどっていくと、道の脇に花が咲いているのを香恋が見つけた。

「あつ、可愛い花！！ステラクロックみたい！！」

「ホントだね。おしべかな。3つ飛び出でて可愛い。」

香恋は根っこからその花を摘むと、まじまじと眺めていた。

その花は色は黄色、おしべが横3方向に広がっていて、まるで時計の短針、長針、秒針のようだった。

そして花弁が12枚と、その上には棘状の小さな花びらが沢山ついている。

その形は星の形をしたあのステラクロックのようで綺麗だった。

「…なんだあ？この花。見たことねーぞ？」

「あー…この花の図鑑からしても載ってねーな。トケイソウって花には似てるけど。」

「トケイソウかあ。あ、こっちには実も生ってる！」

「おおー。美味しそう…。トゲトゲだけど。」

「やっぱトケイソウの仲間だな。これはパッションフルーツって呼ばれてるやつだ。」

「ちょっと中身割ってみろよ。美味しいらしいぜ？」

香恋はそう言われて、興味本位で割ってみた。

すると、中身から果汁が溢れだしてきて、ちょうど星の形になるように実が詰まっていた。

「美味しい！！甘酸っぱいし、ジャムにしたら美味しそうだね…。」

「…案外イケるかも。」

水樹にも好評のようだ。

「…だが、何故こんなところに自生してるんだ？原産地はアフリカだし、トケイソウなんて園芸でしかみないぜ？」

「それに、黄色い種類なんて無いよな。この図鑑には…。もしかして新種？」

「生育には一定の温度が必要で、越冬には最低でも4℃以上の温度が必要である。」

亜熱帯植物のわりに高温を嫌い、30℃以上の気温が続くと、高温障害を起こし、花芽や未熟果を落下させることがある。」

「あ？香恋、お前そんなに詳しいのか！？」

「ウィキペディアから引用した!。」

「…あ、そう…。」

「ただ、それなら…この寒い北海道では子孫を残せるわけがないよね。4 以上も真冬は無いよ? 30 以上は無いけど…。」

水樹は周りを見渡す。

その眼に映っているのはいつもの森……

のはずだった。

「…えっ。」

「…私のおやつ、取った。」

「はあ? お前今それ喰ってるだろ。」

レオンが香恋に言うが…

「違うよ違う! 私じゃない!」

「あ? じゃあ誰が…って……」

「……………」

一同4人が石の様に固まった。

線路の続く先のほうを見ると、小さな小人のような子供が立っていたのだ。

人間にしてはあまりにも小さく、大きなフキの葉っぱを傘のように使っていることで一層小ささが際立つ。その子供はまた同じ言葉を繰り返した。

「私のおやつ、取った。」

「……ち、ちっちゃくないか？こいつ…人間にしては…。」

「私の頭をつかんで言うなあ…！」

「うあ、間違えた…！」

「冗談じゃないのかよ…？」

「ツッコミしあってる場合じゃないでしょ…！」

「おやつ、返して。」

小さな小人は女の子のようだった。

どうやら、この子は香恋の食べてしまったパッションフルーツをおやつにしていたらしい。

「…ああーゴメン、ごめんね！悪気はなかったの…！」

香恋は半分にしたトケイソウの実を女の子にあげた。

「おねえちゃん、良い人。あたし、お礼する。」

片言で日本語をしゃべる女の子。

「いやいや、私はあなたのおやつを半分取っちゃったの。だから、お礼するのは私の方だよ?」

「おねえちゃん、あたしに、お礼?」

「うん、そつだよ。迷子かな?送ってつてあげるよ?」

「あたし、迷子じゃない。『チセ』、出てきた。あたしの『ハポ』、怖い。」

「ああ...?チセ?ハポ...?なんじゃそりゃ」

「...ちよつと待つて。何か聞いたことあるよ...」

水樹が考え込んで、小さな女の子に一つ、お願いをした。

「ねえねえ、『ピリカメノコ』ちゃん、あなたの『コタン』に案内してくれるかな?ハポと仲直りしよ?」

少々考え込んで女の子は言った。

「こつちのおねえちゃんも良い人。コタン、案内する。ついてきて。」

女の子は小さく駆け足で線路の上を器用に走って行った。

「...上手くいったみたいね。」

「おいおい水樹、さつきから何を会話してたんだ？」

「…あんまり言うともまずそうんだけど、あんたたちには言わないと話を通じないわね。」

多分、予想なんだけどあの女の子は『アイヌ民族』か、『コロポツクル』っていう妖精よ。」

「えっ！！妖精さん！！??」

「…マジでそんなものがいるのかよ…??じゃああの子の名前は『ピリカメノコ』ちゃんって言うのか？」

「バカ、分かるわけないでしょ！『ピリカメノコ』は熟語よ！

『ピリカ』はアイヌ語で『可愛い』とか『美しい』とかで、『メノコ』は『お嬢さん』とか『娘』って意味よ。

だから私は、『可愛いお嬢ちゃん、貴女の村に案内してもらえないかしら？お母さんと仲直りしよう？』って言ったのよ。」

「アイヌ民族…絶滅したんじゃないかなかったんだあ…。」

「アイヌ語自体は今にも残ってるわよ？例えば札幌。札幌は『サツポロペツ』っていう『渴いた広大な川』って意味。

世界遺産でも有名な知床は『シレトク』…地の果てって意味から来てるのよ。」

「水樹、詳しいね…」

「伊達に北海道学っていう教科、取ってないわよ？」

水樹は得意げな顔でそう言った。

「っておい！？あのちっちゃいのは！？」

「…しまった…見失った…。」

「おいおい…もしかして俺ら、幻覚でも見てたんじゃねーのか？」

「…そうかもね。妖精を見るなんて、今考えてみてもバカらしいわ。」

「…うわ、ひどっ。」

「でもさ、でもさ、私の取ったトケイソウの実、無くなってるよ？」

「それだって幻覚だったんじゃない？ほら、回り見てみるよ。」

言われるがままに香恋は周りを見る。

すると、さっきまでそこに生えていたはずのトケイソウが無くなっている。当然、木の実もだ。

「あれ！？あれ！？無い！！」

「…集団幻覚ね。多分、この森には麻薬植物などが生えてるんですよ。気化したその粉で皆催眠にかかったのよ。北海道ではよくあることよ。」

「納得いかないっ！！」

香恋はプリプリし始めた。この幼い癖は小さいころから直らないらしい。



「ほら、帰るわよ！」

「えー！？まだ探検してねえぞ！！」

「うーっさいわねえ。ホントに麻薬だったらどうするの！行ったんバンガローに戻って夜の星の観察まで休んでなさい！」

「はい…。」

「はいは短く！！！！」

「はいはい。」

「ハイは1回っつ！！！！」

「っっハイッツツ！！！！」

4人はその線路の道を後にした。香恋がトボトボ歩いた後ろには香恋のポケットからはみでた黄色い花が落ちていた。

## 9・Delete Delete

「ホント！ホントだってば！ホントにコロポックルを見たの！！」

「…一緒にいた3人が違うって言うてるのにどうしてホントなんだよ…。3対1だぞお前。」

「そ、それは…」

香恋達は焼き肉をしながら談笑し合っていた。

時刻は6時。夕飯には少し早かったが、星を見に行くのに道具を持っていかなければならないので、早めの夕飯だ。

「まあ、このキャンプが終わったら一応4人で病院行きましょ。気化した大麻だったら困るし…。」

「ああー、こいつは既にラリってるから今連れてくか。」

「ラリってない！！むしろレオンの方がラリってる！！」

「ああ？（もふもふ）」

レオンは肉を頼いっぱいに頬張りながら生返事を返す。

「あー！！私のカルビ取ったな！！」

「かつばえびせんならここにあるぞ。」

「それはカルビー！！なんで夕飯にお菓子なの！！」

「まあまあ水樹、私が釣ってきたアユがありますわ！」

「そお？じゃあ、頂こうかな。」

水樹は程よい加減に焼けたアユを手にとって豪快に齧り付いた。

「あら、おいしいわね！」

「勿論、私が釣ってきましたから！」

「まあー誰が釣っても同じだけどなー…ガハアツ！？」

天が美海にノールックチョップをされた。ノールックパスのチョップ版である。

「…なんか芋喰いたいな。芋。フライドポテト。」

大自然の中で無茶を言う幸村兄。

「無理言わないでよ。油で揚げるのは山中では不可能よ。」

「マック行つて来いよ。ハッピーセットとしての振りだろ？それ。」

「墓穴掘った……」

「バカ兄貴……」

この談笑焼き肉パーティは午後8時まで続いた。

そして時刻は8時半。

「よし、出発だ!!」

「もう星空が綺麗だね。あ!あれ、夏の大三角じゃない?」

「あれがデネブ、アルタイル、ベータ」

「君は指さす夏の大三角（ノ。ノ）」

「おーぼーえーてー空ーを見るー」

香恋、桜、羅夢が某凄い細胞の化物の物語のテーマソングを歌う。

「アレガなんて星、あったか?」

「…それじゃあ夏の大四角形じゃない!!」

パコオンッ

と、レオンは水樹に殴られた。

「…お願い事、叶えてくれるかな。織姫様と彦星様。」

「あら、ロマンチックですね香恋ちゃん（\*・・\*）」

「そんなじゃないよー。ノノ」

「あれ、流れ星にお願いしたんじゃないの？」

「うんとね、丁度近くに有った短冊のお願い事カードにも書いてきたんだ！」

「…欲張り娘…」

「…あれ？こっちで合ってるっけ？」

と、レオンが言う。どうやら先に探索はしてきているようだ。

「…あ、こっちじゃないわよ。こっちは私達が昼間に探検してきた方向でしょ！」

「いっけねー…すっかりすっかりちゃっかりやどかり忘れてたぜ…」

「私の持ちネタ取るなあ！！」

「持ちネタっ！！؟؟しかもなんか増えてね！？」

というわけで、一行は全く違う方向へと来ていたのである。

ついでに言ってしまうと、迷ったのだ。普通は迷うはずの無い一本道だったのだが、来た道は既に獣道に成っていた。

それでも、その荒れ果てた道には赤さびで覆われた線路がある。

「…私たち、ここ通ったっけ？」

「…ううん。こんな荒れた道は歩いてないよ…」

「…ダメだ、スマホのGPSも圏外だ…」

最新式のモノには目がない大和が言った。

「おいおい、こんな星明かりしかないところで迷ったのかよ?」

「元はと言えばお前が先頭切るからだろ!」

「ああ?何イ?お前らが付いてきたんだろうが!」

男子三人がケンカを始める。が。

「…うるさいっ!!!!!!!!喧嘩しても無意味だってことが分からないの!」

「…すみません。」

「サーセン…」

水樹による一括で三人は小さくなった。

「…って怒って見たは良いけど、どうすれば…」

「…私達は南から来たんだから、南に戻ればいいんだよね?」

「うん…そうだけど、どうするの?」

「ほら、みんな天文部でしょ!あの夜空に見える北斗七星を使って方角を調べるんだよっ!」

自信満々に演説を開始する香恋。しかし…

「香恋の言うことだから当てにならないぜ…」

「酷いッッ！！？？」

涙目で訴える香恋。  
気を取り治して…。

「あの北斗七星のひしゃくの先を見て！その先には綺麗な明るい星があるでしょ？あれが北極星！  
で、北極星のある方向が北ってわけだから、逆の方向に進めばいいんだよ！」

「おお、マジか！？その情報！！」

「うん！って事は…あっちだよ！！」

「…うん。お前、やっぱり首絞めて良い？」

「……え？」

香恋はその先を見て驚愕した。

通ってもいない怪しげなトンネルがあったのだ。その先に。

「嘘だったのかよ！！！！」

ギリギリギリ

「待つて待つて首しまつてるっ…嘘じゃない…よ…っ…キユウ…」  
ぱたん。と、香恋はレオンに首を絞められて力尽きた。

「加減しただろ。早く起きろよ。」

「まったくう…でもなんでさっきは無かったのにいきなりトンネルが…」

「…先は真っ暗で何も見えないよ？（ＴＴ）」

「お先真っ暗って奴ね。」

「諦めるのかよー!」

「…星の研究どころじゃねーな…。でもよ、線路はトンネルの中に  
続いてるぜ?」

「…ってか、線路辿れば戻れるじゃん。」

「あ」

「…あ」

「あ じゃねーよあじゃー!…!」

「でもさ、後ろに線路、無くなってるよ…?」

「…………え…………?」



全員が香恋に言われて振り向くと、確かにそこには線路が跡かたもなくなっていたのだった。

## 10・Trouble Trouble

「おいおい…肝試しは12時からの予定だぜ…?」

「やるつもりだったのかよ!!　つか、今はそんなことどうでもいいな…」

「…仕方ないですね。先に進みましょうよ。」

「そうだね。先に行くしか選択肢が無いなら、行こうよ。」

一同は全員トンネルの中へと入って行った。

「…暗いな…明かり、持ってるか?」

「はい。懐中電灯。」

パツと、明るい光がトンネルを照らす。  
するとそこにはいくつもの落書きがあった。

「この先、アイ…ロポ…タン?文字がかすれてて読めねーな。」

「…小さい人の絵がたくさん…不気味だね…。」

「…これ、パッションフルーツですね。寝てる人に食べさせているような…」

美海が一つの絵を指して言った。

「北海道にパッションフルーツなんて育たないよ？寒過ぎて…。」

「パッション…フルーツ…」

水樹は何か閃いたかのように、突然あたりを見渡す。

そして、お目当ての絵があったようで、全員をこっちに呼ぶ。

「…みんなこっち来て！！ 私たち4人は、見覚えあるよね…？」

「…これは…ッ…」

「ホシトケイソウ！！！」

香恋が摘んだ、一輪の花がそこには描かれていた。少々いびつだったが一度見た人なら分かる。

「…ステラクロックみたいな形だね。」

「…花弁が12枚で、おしべも3つ3方向に開いて…まるで時計みたい…（。。。）」

「…水樹！！私、そのステラクロック、探してみる！！」

「あ、ちよつと待ちなさいよ香恋！！！」

香恋は仲間たちを置き去りにしてホシトケイソウを探しに行った。しかし、探しに行くまでもなく、待っていたかのようにトンネルの出口に一輪だけトケイソウが咲いていた。

それはホタルの様な光を纏っており、若干明るい夏の夜では一層不気味に、かつ美しく見えた。

「…なんで…入ってくる時は無かったのに…」

と、流石に恐怖さえ覚えた香恋だった。がトケイソウを摘み取り、持つ仲間たちのところへと戻った…

までは良かった。

香恋がそのトケイソウを持って後ろを振り返って走って行ったあと、トンネルの出入り口は花弁が閉じるように空間を塞いでいった。

1枚、1枚…合計、12枚の花弁が段々と閉じて行って完全に出口はふさがれた。しかし、その事には香恋たちは気づいていなかった…。

「ステラクロック、見つかったよ!!!」

「……」

しかし、香恋の言葉に一同は反応しない。

「…みんな、どうしたの？ステラクロックはあったけど…」

「人が…死んでる…」

「……なっ……」

「女子はこっちを見るなあッ！」

しかし、大和のその言葉はもう既に遅かった。

「……きゃあああああああああああ！！！！！！！！！！」

出口のふさがれたトンネル内に女子勢の悲鳴が反響して全員の鼓膜に大ダメージを与える。

「うがっ！？お……い……叫ぶんじゃねえ！！！！！」

麗音の怒鳴り声も同じように反響して、泣き面に蜂だ。

「……落ち着きなさい皆!! 急いでここから脱出するよ!!!」

水樹の掛け声とともに出口へと向かう。しかし……

「……なんで……なんで出口がふさがってるの……」

最初に驚いたのは香恋だった。最終的に最後に入ったのは香恋だからだ。

「チツ…逃げられねえって事かよ…上等じゃねえか…」

「…羅夢、遺体の状態を見てくれ。」

「ええ。……おそらく、死後半年から1年は経過してる……。白骨化してるし……」。

でも、損傷が少ない……あ……あ……」

羅夢と大和のハッピーセットが遺体を調べる。  
羅夢は何かに気付いたようだ。

「どうした？」

「ミイラ化してる首にかすかな索条痕さくじょうこんが有るよ。何か、縄みたいなもので絞め殺されたみたい。」

「さすが、母親が警察なだけあるね…。」

「…これは…」

軍手を履いた大和が遺体のバッグから何かを見つけた。

「…ステラクロック…」

バッグの中から大量のホシトケイソウが見つかった。  
ただし、それは半年以上も経過しているためか、干からびて一部は粉状になっている。

「…待てよ…おかしくないか？この遺体…。」

「え？なんで…？」

「よく考えてみるよ。半年から1年の間に死んでるのなら、季節は冬か秋だぞ…。」

この干からびたステラクロックはどう説明するんだ？。」

「…どうって…どうもないけど…」

「バカかお前は。お前のそのステラクロックを摘んだのはついさっきだ。」

それゆえにこの花が1年草ならば春から夏にかけて咲く花だ。そして死んだ時期は秋か冬。

当てはまるわけがないんだよ…」

「もしかしたら俺らの検死が間違ってるかもしれないぜ？親の見よう見真似だしさ。」

「…まあその可能性を指摘されると反論は出来ないがな。」

麗音は腕を組んで言った。

「…なんでこんなにステラクロックが必要なんだろう…。」

「…簡単じゃない。私達の体験したことで照らし合わせれば。」

落ち着いた口調で、だがどこかに不安げな表情を浮かべて話す水樹。しかし…

「…うつ…！？」

「な、なんだこの痛みは…ッ…」

「くっ…頭痛が…ッ！！」

突然、麗音と天、水樹が苦しみ出した。そして…

カチッ

とどこかで小さな機械音が響いたのを香恋は聞き逃さなかった。ただ、3人が苦しみ出したのでそんな事はどうでもよかった。

「水樹！？麗音！！！」

「お、俺はどうでもいいのかよ…ッ」

「しまったっ忘れてた！！天大丈夫！？」

「テメエの…頭の方が心配だ…ぜ？」

「こんなときに突っ込みをするな！！」

「救急車は！？」

「ダメだ！！ケータイが繋がらないっ！！！！圏外だッ！！」

「とりあえずこの3人をおぶって外へ避難だっ！！」

苦しむ3人を背負ってトンネルの外へ出ると、そこは小さな集落のある村だった。

真っ暗で明かりもなければ街灯も無い。ただ、月明かりと懐中電灯のおかげで家が確認できるだけだった。  
しかし…



「家が…小さい…？」

と、大和が言った瞬間にトンネルが一瞬にして消えてしまった。  
代わりにあの錆びれた線路がまた後ろに続いていた。：暗闇の森の  
中に。

## 11・Survive Survive

「…もう、怖いですわ…」

半分泣き目になっている美海。いつもは強気の美海もさすがに耐えられないまでに来ていた。

「俺らは…いいから…お前らだけでもあの…線路を通って帰れ…」

「ダメだそんなの!! お前らを置いて帰るなんて出来るか!! みんな仲間だろそんなこと言うんじゃないやねえ馬鹿野郎!!」

大和が怒ると、天は微笑んで大和の背中であた眼を閉じた。

麗音も目を閉じてしまい、3人は全員気を失ってしまった。

水樹は羅夢の背中、麗音は香恋の背中であた目を閉じていた。

息はゼエゼエ言っているのに、命はあるがそれも持ちこたえるかどうかは分からない。

ただ、疑問点がある。

「…何故、この3人だけが突然倒れたんだ？」

「…そうね。逆に言えば、『何故香恋は助かっているのか』とも考えられる。」

「なんで？」

「…お前らだけ一緒に行動したのに、お前は助かってる。その間に

何かがあつたんだ。

原因はそれしか考えられん。他は無事なんだから。」

「…この3人に訊くのはほぼ不可能だし、香恋が答えなきゃこの3人は助からないわ。多分…。」

「…うーん……。」

カチッ

「ん？」

「なんか、今…機械の音が聞こえたような…」

「…この音、さっきもしてたよ。これで2回目…?」

「待ってください香恋ちゃん。その花を…」

「これ？」

桜にステラクロックを渡すと、じつと見つめる。

すると、自分の腕時計と比較するように見た。そして…

「…信じられないかもしれませんが、この花、『真正正銘の時計』ですよ。」

ほら、この一番長いおしべを見て。この腕時計の秒針のように動いてるでしょ…?（・・）（・・）」

「…ほんとだ…」

香恋の体感だが、確かに1秒ごとに一番長いおしべが一定間隔で回っていた。

「…何故か私の腕時計の進み方が恐ろしく遅いんですけどね。(´・`・´)」

「…なんだってんだあ！？この世界は！！植物なのに時計のように動くんなんて…」

不思議の国のアリスかよ！？」

「お兄ちゃん、それ、星の時計。ホントの時計だよ。ウサギさんも居ないし。」

「え？羅夢、今俺の事お兄ちゃんって…」

「呼んでないわよバカ兄貴！！」

「じゃあ今のは…」

「私はここだよ。お兄ちゃん。お姉ちゃん。」

と、先ほど香恋がであった小さな妖精がそこにはいた。

「ああ！！！！ピリカメノコちゃん！！！！」

「お姉ちゃん、今は夜だよ。騒いだらみんな起きちゃうよ。それに、私の名前、そんなのじゃないよ。ポポって言うんだよ。」

「これが…香恋の言ってたコロポックル…」

「可愛いっつー!!!」

「ポポちゃん…、ポポちゃん！星の時計って？」

「そのお兄ちゃんたちの残り生きられる時間を示した時計だよ。花弁が12枚、1夜に一枚落ちるんだよ。

カウントダウンするの。死へのカウントダウン。」

ポポ…と名乗る小さな妖精はトンネルで出会ったときよりも言葉遣いが現代風になっていた。

「残りの…生きられる時間…だと…？」

「その花の花粉には毒が入ってるの。12日しか生きられない毒が。それを吸っちゃったんだよ。そしてあなた達全員も吸っちゃってる。だから私の後についてきてって言ったのに。解毒剤、あるのに。」

「いや、アナタ足が速かったから…」

「え？あ、ごめんなさい。」

ペコリ、と礼儀正しくお辞儀をするポポ。

「でもさ、一つ聞いていいか？」

人差し指を立てながら言う大和。さながらオールバックの刑事のようにも見えた。

「はい。どうぞ。」

「さっきのあの遺体は？同じく毒にやられたのか？」

「遺体？……？」

ポポは何も分かっていない様だった。

「あー…知らないなら良いんだ。それと、もう一つだけ。  
こいつは、その3人と一緒だったのに何故無事なんだ？」

大和は香恋を指さして言う。

「お姉ちゃん、私のおやつを食べたから。苦しまないだけ。でも、私も同じ。もう木の実ないから12日しか生きられない。  
今は何も聞かないでこの木の実を食べて。解毒剤。4つしかないからどうするかは自由だけど…」

ポポは香恋に木の実を4つ渡した。その木の実は昼間に香恋が半分だけ食べたパッションフルーツだった。

「コロポックル、毎日それ食べてるから生きてるの。家の周りにはその花が群生してたから。でも、村が人間によって破壊されて今はポポの家族しか居ない。」

だから、これが最後の木の実。木の実全てを食べれば毒は全て消えて生きられる。木の実を半分食べれば苦しまずに12日後、死ぬ。

食べなければこの3人のように苦しみなから死ぬ。半分食べさせればこの3人も苦しみからのみ解放される。どうするの？」

「私はさっき半分食べたから、みんなで分けて。」

「私もお姉ちゃんに半分もらったから数に入れないでね。」

「…分かった。木の実は4つ…半分にすれば8欠片。7人の苦しみは助かるって寸法か。」

「でも、誰も助けなくて良いの？下手したら全員12日後に死んじやうんだよ？」

全員が黙り込んでしまった。

無理もない。全員が全員、まだ青春真っ盛りの高校生なのだ。部活に燃える人や恋に燃える人、習い事に燃える人、勉強に燃える人。すべてがこの天文部に居るのだ。

そこで大和が恐る恐る口を開いた。

「…俺は、死ぬときは一緒だぜ…？」

「大和…」

「兄貴…」

「そうですね！私も大和さんと一緒に考えよ！自分だけが助かったって嬉しくありませんもの！！」

美海も同意見のようだった。

「じゃあ、皆で半分ずつ分けるって形で良いの？」

小さなコロポックルが聞く。

「うん！みんな優しいからね！よいしょっ。」

香恋は木の実を半分に割り、3人の口に放り込み、よく嚙ませてから飲み込ませる。

「…数十分で効果が出てくるはず。余ったこの半分の木の実はどうするの？」

「…捨てちまうのももったいないしな…。」

「持って行きましょう。この半分を誰かが食べれば生き残れるんですから。（・・・）」

桜は小ビンの中に半分の木の実を大切にしまった。

半分の欠片の木の実は、静かに呼吸をするかのように小ビンの底に転がっていた。



## 12・Journey Journey

「そうだね。でも、私たち、この12日間どうすればいいの？もうパッションフルーツは無いんでしょ？」

「村が全滅したからもう無いの。でも、村に無いだけでまだ希望はあるよ。」

「…この大森林の中から探すのか？」

「ううん。この森にも無いよ。全部やられた。でもね、ノチウカムイの塔のてっぺんで星に願うとお願い事が叶うんだって。」

「…ノチウカムイ…？」

「願懸けかよ…正直言っちゃまうと、それ、当てになるのか？」

「…分からない。私も行った事無い。でも、今はこれしかない。でも、遠いの。ここから大体250キロも先だってばっちゃんが言ってた。」

「…ばっちゃんって…」

「…ポポちゃん、その塔に行くのは良いんだけど時間が無さ過ぎるよ。12日って…食料もなければ交通手段も無い。」

それに、12日も行方不明だったら搜索願いつてのが出されて捕まっちゃうよ？」

「それは大丈夫。ここはお姉ちゃんたちの世界とは違う世界だし、

時間の流れが違うの。

このステラクロックの時間は腕時計とかの時間とは違うよ。腕時計をよく見て。24秒に1回動くはずだよ。」

桜は言われたとおりに腕時計を見て、24秒数えた。

「22、23…24！！ホントだ！（）；。 （）」

「つまりは…こっちで12日過ごしても、実際には半日しか経過しない計算になるな…。」

「なんで？」

「アホか…こっちでは時間の流れが1/24。で、1日の長さは24時間。丁度一日当たり1時間しか経過してない計算になる。つまり、12日で12時間。半日のみだ。」

「おおー！！！」

「あのトンネルは別の世界への扉だったのか…。」

「時間はクリア…後は食料と交通手段だが…。」

「食べ物、サバイバルだよ。仕方ないの。私達もそうやって暮らしてきた。」

でも、交通手段はあるんだよ。」

と、ポポはとてとて…と、古ぼけた線路の上に立ってフキの葉っぱで作った草笛を吹いた。

その音色は森林中に響き渡り、いつのまにかフクロウやモモンガな

どの鳴き声も一緒に響き渡り、大合奏となっていた。

「…すげえ…」

「なんていうか…神秘的…」

と、感想を言っていると線路の続く森の中で何やら轟音が聞こえてきた。

「森が…動いてる…」

森の木々たちが一齐に線路の上から退いたのだ。

まるで足のように根っこが歩き、倒れた丸太はコロコロと転がって邪魔にならないようになった。

そして、その先からはライトが見える。

「…電車!!??」

「…いや、違う…。電車よりもっと短くて大きい…」

「あ、あれは!!!」

全員の視線の先には、つい先ほどまでそこで楽しく談笑していたはずのバンガローが線路の上を走ってきていた。

「…んなアホな…」

大和は衝撃と笑撃を表情にあらわにして不思議な感覚に陥った。

「フォレストレイン…。みんなはそう呼んだ。でも、人間がキャンプ場にしちゃったから、フォレストレイン、動かなくなった。」

「…あのバンガロー、ホントに線路の上を走るんだ…。」

「ばんがったね…！」

「…この状況でよくダジャレ言えるなお前」

家の走る線路は徐々に伸びて行き、ポポが草笛を吹いた少し後ろで止まった。

「ところで、さっきは時間の流れが違うって言ってたけど…この世界に人間は？」

「普通は居ない。どこからかあなたたちみたいに迷い込んできた人のみ。」

さっきの比喻表現通り、ここは不思議の国。言うなればアイヌとコロポックルの楽園。

世界は同じでも時間軸が違ってる。何もかもが同じじゃない。」

「…」

「夜空に同じホシが無いように、この世界に同じものは存在しないんだよ。」

夜空を見上げながら犬よりも小さな少女が言った。その姿はどんなに大きな生き物よりも強大で寛大に見えた。

ポポ含めた天文部の一同は列車式のバンガローに乗り込み、足場の悪い線路の上を走っていた。

「確認するよ。私達はノチウカムイの塔へ行ってお願い事をする。そして、それがホントでも嘘でも懸ける事に変わりはない。そして、この後どんな困難に遭うか分からない。それでもこの急な旅は続けるんだよね？」

「ああ…。それしか助かる手立てが無いのならな。」

「あの遺体と同じくなっちゃうからね…。」

「…あの人、名前は『牛木亮輔』って言うみたい。手帳を持ってきたよ。」

と、羅夢が遺品であるはずの手帳を持ってきている。

「お、おい…遺体の遺品を持ってきたら…」

「だってここは人間界じゃないんでしょう？迷い込んだ人の遺品は手掛かりになるかもしれないじゃん…。」

「…それもそうだな。俺たちまであんなつまつたら本末転倒だし

な。」

「手帳には何て？」

「…手帳っていうか、日記みたいになってる。…日付は擦れてて読めないけど…」

『可笑しいな世界に迷い込んだみたいだ。人間が全く見当たらない。居るのは沢山の動物たちと小さな小人だ。』

この小人は人間が珍しいのか、すぐに近くに寄ってくる。可愛いものだ。』」

「…ポポの仲間…。」

「マジかよ…続きは？」

「『小人から聞いた話では、この世界の途中で5つの鍵を見つけ、ノチウカムイの塔へ行くと助かるらしい。』

その5つの鍵はある屋敷に隠されているという。少し気になるので、小人に同行してもらい、旅に臨むとする。』」

「…死亡フラグ…」

「続きを。」

「『ロクなモノを何も食べずに3日が経った。流石に限界だ。手持ちのこの木の実も底を突いた。』

あれほど量があったのにも関わらず麻薬的な美味しさを持っていた木の実だったのですぐに無くなってしまう。』

あの木の実が成っていた一年草をバッグに出来るだけ詰め込んだ。もしかしたら木の実になつてくれるかもしれない。』」

「…ポポちゃん、やつぱこのホシトケイソウは麻薬なのかな？」

「…分からない。まやくって何かが分からないから。でも、お父さん達は葉っぱを丸めて火を付けたりして吸ってた。」

「…一種の趣向品だな。煙草に似たようなもので依存性が高いのは間違いないな。」

「続きは？」

「…なんか、日記みたいで手掛かりがありそうにもないから最後のページ読むね。さっきのページから4日後。

『化物屋敷から出られない。解読不能な暗号があり、それを解けば出られるらしいのだが私には不可能なようだ。

小人もここまで付いてきてくれたが、いつの間にか屋敷から姿を消した。暗号を解いてしまったのか、それとも私の幻覚なのか。

しかもバッグに入れていた花が時計のように動いていて、花卉がもう1枚しかない事に気が付いた。これは何を示しているのか。

結局木の実には成らずに、乾燥して粉になってしまっているのもいくつかある。…薬の一種のようなものと小人から聞いたので、

今夜はこれを吸って眠るとしよう。』」

「…これがこの人の最期ってわけか…。」

「屋敷…か。そこに5つの鍵があると。」

「…ねえ、ちよつと待ってよ…その人は木の実を食べてるのに何故死んでるの…？」

「…冷静になれ香恋。あの遺体には索状痕があっただろ。ということとは、誰かに殺されたとしか考えられない。」

だが…ポポに一応聞いておくが、12日たった時には苦しんで死ぬのか？」

「…分からない。でも、あの木の実の効果も12日って聞いたこともあるよ。私たちコロポックルも毎日木の実を食べてるわけじゃなかったし。」

あの花の毒の効果も12日、木の実の効果も12日だとすれば多少のタイムラグが発生してしまうかもしれない…。」

「…数分は苦しむかもしれないってことか…。」

「…そういえばポポちゃん、随分日本語が達者になってるわね。どうして？」

「…コロポックルは成長のスピードが極端に早い。ただし、寿命も長くて300年だって。」

木よりも早く死んじゃったら守り神の意味が無いからね。やっぱり、成長が早いと言葉も覚えるのが早いのかなあ。」

言葉のおかげかどうかは不明だが少しだけポポが大きく見えた。そんな気がした。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6770v/>

---

STELLAR CLOCK

2011年11月27日12時54分発行